



東京都町田市 吉崎 洋子 さん

Q 差し支えなければ、年齢と出身地を教えてください。

A 1945年6月、終戦の2か月前に静岡県浜松市に生まれ、現在78歳です。

Q ごみ問題に関心をもつようになったのは何故ですか？

A 現在も住んでいる東京都町田市・藤の台団地に家族4人で転居してきたのは1976年。団地は30代40代の家族世帯で3400戸、人口1万人超の活気あふれる街でした。

町田市はすでにごみの5分別を取り入れ、処分場・焼却場と共にリサイクルシステムを備えたセンターも稼働していました。

団地では、新住民の中の先進的な考えをもった方々が、ダイナミックな活動をさまざまに展開していましたが、その活動源となったのが、独自の地域資源回収と収益の管理・活用でした。



1981年の資源回収風景

管理団体として「藤の台子ども基金」が発足し、ごみ集積所の脇に資源置き場が設けられて、3400世帯から出された資源を契約業者が週一回回収するシステムが作られました。また、子どもたちが各家庭を回って資源を集める「リサイクルキャンペーン」やリサ

イクルバザー、講演会を通して住民への啓発活動も頻繁に行われました。

その資金を使って、廃バス利用の「子ども文庫」、借地にプレハブ建ての「幼児教室」、「親子まつり」、高齢化が進んだ1995年以降は「お食事会」「助け合いの会」「のらねこ対策会」「花の会」「高齢者見守り支援ネットワーク」等々が開設運営されてきました。

特筆すべきは、1980年の住宅公団未利用地を借用しての施設建設です。資源回収で生み出した1500万円の資金で建設された「藤の台ホール」は地域活動のかけがえのない拠点となりました。

地域での活動に加わる中で、私の中でも<混ぜればごみ、分ければ資源>が当たり前になっていました。



43才になった藤の台ホール

Q ごみかんに入会して下さったきっかけは何ですか？

A 実は、私もごみかん立ち上げメンバーの一人です。

日の出処分場問題が発生し、ごみを出す側である三多摩15市の市民と共に「区内処理を実現する市民プロジェクト」を立ち上げ、1996年にドイツから講師を呼んでの講演会を開催したのが、ごみかん発足の最初の一步です。

この講演会を支えたメンバーが中心になって設立した「市民環境情報センター」（しみかん）を経て「ごみ・環境ビジョン21（ごみかん）」ができました。

さらに2000年代にはNPO法人化、ドイツへの視察、絵本「ごみのへらしかた」および環境教育の副読本の出版、ごみ環境問題を扱った劇団「ビジョン座」の活動、東京都や環境省のシンポジウムでの提言など、精力的に動きました。心をひとつにする、かけがえのない仲間たちと共に疾走した10年でした。

Q ごみ問題に関わること以外で趣味や生きがいは？

A いくつも抱えていた地域の活動も、運営に関わるのは一つだけとなり、長く続けてきた朗読に三味線を合わせた新しい芸(?)を深化させたいと思っています。そして、カルチャーに特化した地域での活動立ち上げを、ひそかに目論んでいるこの頃です(笑)

Q 特筆すべき近況があれば教えてください。

A 町田市で「3R市民リーダー」の認定を受け、市内各地のイベントで3Rクイズのブースを担当して、細々ながらごみ関係にもかかわっています。

Q ごみかに期待したいこと、あるいは提案したいことをお聞かせください。

A ごみかんはく反対運動から提案活動へ>そして<目の前のごみから上流域へ。原材料の搬出、生産、流通、消費をトータルにごみ問題と捉える>重要な活動を担ってきたと思います。

専門的な知識を持ちつつも、フラットな市民目線から課題を提起し、情報発信し続けている、貴重な存在。長く継続している皆様を心から尊敬し、変わらぬ応援団でいたいと思っています。